毛沢東と胡適

森　川　裕　貫

はじめに …… 1
Ⅰ　毛沢東と胡適――3冊の書籍の叙述 …… 2
Ⅱ　異なる叙述の背景 …… 5
Ⅲ　若き毛沢東と胡適の交流 …… 7
Ⅳ　共産党員毛沢東の胡適観 …… 11
Ⅴ　胡適の毛沢東観 …… 14
Ⅵ　毛沢東への強い関心の背景 …… 18
Ⅶ　胡適思想批判運動への対応 …… 21
結　論 …… 23

はじめに

1893年に生まれ1976年に死去した毛沢東は、世界史に名を残した人物として今日なお注目される存在であり、彼に関する研究や著述は、中国語を中心に精力的に刊行されている。これに対し、1891年に生まれ1962年に死去した胡適という人物は、世界的には毛沢東におよばないとはいえ、中国や台湾では毛沢東に劣らずきわめて有名な存在である。そのため、中国や台湾では胡適自身の著作が様々な版で刊行され、彼に関する研究業績も毎年数多く発表されている。

この著名な二人の人物の間に、一時期密接な交流があったこと、しかしのちには相容れざる間柄にいたったことも、比較的よく知られているところである。そしてこの関係については、すでに複数の研究が注目して事実に基づいた考察がなされている。本稿もそれらの成果を随所で参照している(1)。

ただし、先行研究には不十分な点も残る。事実に基づいた考察はあまりに当然のことだ

が、毛沢東と胡適の間の関係を説明する際、かつてこの当たり前の作業がなされていなかったという問題が存在している。簡単に言えば、毛沢東と胡適の関係については、過去の一時期事実がゆがめられて説明がなされていたのである。なぜそうした事態が生じたのか、先行研究は明確な説明をしていない。しかし、このゆがみを直視しなければ、毛沢東と胡適の関係を十分に説明することはできないだろう。

そこで本稿は、毛沢東の伝記として長く参照され現在もなお大きな価値を有するエドガー・スノー、蕭三、李鋭の著作を取り上げ[(2)]、それらが毛沢東と胡適の関係をいかに叙述していたのかをまず検討する。その上で、先行研究がほとんど留意していない胡適 “My Former Student, Mao Tse-tung”（1951）といった史料を活用しつつ、毛沢東と胡適が実際にどういった関係を取り結びまたお互いをどのように評価していたのか、説明を行うこととしたい。

Ⅰ　毛沢東と胡適――3冊の書籍の叙述

毛沢東が自身の来歴を積極的に語らなかったこともあり、若き毛沢東を理解するための手がかりは、かつて非常に限られていた。そうしたなかにあって、研究者の信頼を得ていたのが、エドガー・スノー『中国の赤い星』（1937年）、蕭三『毛沢東同志的青少年時代』（1949年）、李鋭『毛沢東同志的初期革命活動』（1957年）という3冊の書籍の叙述である[(3)]。ところが、これら3冊の書籍における毛沢東と胡適の交流に関する記述には、食い違いが見られる。まずはそれぞれの書籍が、二人の関係をどのように説明しているのか確認しよう。

1　エドガー・スノー『中国の赤い星』

スノーの叙述のなかで、毛沢東が自身と胡適との関係について触れているのは、次の二箇所である。

> 〔利群書社や互社などの〕これらの結社の大半は多かれ少なかれ、陳独秀が編集した文学復興の有名な雑誌『新青年』の影響をうけて組織されました。私は師範学校の学生のとき、この雑誌を読みはじめ、胡適と陳独秀の論文を非常に尊敬しました。彼らは、私が既に捨てた梁啓超と康有為に代って、しばらくの間私の模範となったのです[(4)]。

> 1919年に私は再度上海を訪問しました。そこで再び陳独秀に会ったのです。彼に最

初に会ったのは北京で、国立北京大学にいたときですが、おそらくほかの誰よりも彼は私に影響を与えました。その頃、胡適にも会いましたが、湖南の学生運動を支持してもらおうとして彼を訪ねたのでした[(5)]。

以上の叙述からは、毛沢東がしばらくの間、そして陳独秀にはおよばないとはいえ、胡適を模範とするほど尊敬していたこと、また実際に胡適と面会していたことが読み取れる。だが、毛沢東自身の肉声に由来するはずのこうした生き生きとした描写は、蕭三と李鋭による著作では完全に消失することになる。

2　蕭三『毛沢東同志的青少年時代』

蕭三は毛沢東の幼なじみの一人であり、毛沢東同様やはり中国共産党に入り主に文芸の分野で活躍したことで知られる。彼がまとめた『毛沢東同志的青少年時代』（新華書店、1949年）には、若いときから毛沢東が優れた資質をもっていたことを強調する描写が随所に見られる。また、青少年時期の毛沢東に対する楊昌済や『新青年』の影響の大きさを強調しつつ、胡適についても次のように紙幅を割いている。

「五四運動はその開始においては、共産主義的知識分子、革命的小資産階級知識分子と資産階級知識分子（彼らは当時の右翼であった）という三つの部分の人々からなる統一戦線革命運動であった」（「新民主主義論」）。のちになって、この革命運動に参加している知識分子、文化界あるいは思想界とで、この統一戦線には分化が生じた。すなわち、一部分は李大釗、毛沢東、瞿秋白、惲代英などの同志を中堅的代表とし、急進的革命民主主義から無産階級的社会主義、さらには共産主義へと向かった（陳独秀は当時この部分の主たる代表の一人であった。『新青年』雑誌はマルクス主義を宣伝する刊行物となったが、陳独秀のマルクス主義理論に対する理解は非常に浅く、また彼は非常に傲慢であったために、1925年から27年における大革命にあって、完全に無産階級の立場を失い、重大な右傾機会主義に陥り、大革命失敗の主たる原因の一つとなった。のちに彼はトロツキー集団へとさらに堕落し、完全に反革命の路線を進んでいった）。一部分の代表は胡適を代表とし、「実験主義」へと向かい、「多く問題を研究し、少なく主義を談じる」ことを主張した。李大釗同志は「再論問題与主義」という一文を発表して胡適に反駁し、マルクス主義の流行は「実に世界文化における一大変動」であって、問題の研究は方法を離れることも主義を欠くこともできないと指摘した。しかし、胡適の発表した「新思潮的意義」は、マルクス主義に反対し「一点一滴の改

造」「あれやこれやの問題の解決」を主張して社会の根本改造に反対し、のちには「好人政府」「整理国故」などと主張するにいたった。この段階において、胡適を含めたこれらの「資産階級知識分子」の大部分は、「敵と妥協し、反動方面に立ってしまったのだった」。「当時の資産階級知識分子（中略〔蕭三自身による中略である〕）の中間の大部分は敵と妥協し、反動方面に立ってしまったのだ」（「新民主主義論」）[(6)]

「新民主主義論」（1940年）という毛沢東自身の著述を絶対的前提としつつ、1919年に生じた問題と主義をめぐる論争において李大釗が胡適に反駁したこと、胡適がそれを受け容れず「資産階級知識分子」として反動の立場に身を置いたことを批判的に説明しているのが見て取れる。その一方で、毛沢東が胡適を尊敬していたこと、そして胡適と直接面識があったという『中国の赤い星』の叙述は、まったく反映されていない[(7)]。また、胡適や陳独秀への冷淡な筆致と比較して、李大釗に対しては好意的評価を下していることも読み取れる。

3　李鋭『毛沢東同志的初期革命活動』

毛沢東の秘書を務め、また廬山会議で彭徳懐反党集団の一員として糾弾された李鋭は、党史研究にも従事しつつ、晩年の共産党への鋭い批評でも注目された人物である。彼は、1949年から52年まで中国共産党湖南省委員会宣伝部部長を務めており、その立場を生かして毛沢東の伝記執筆も手がけ、1952年に『毛沢東同志的初期革命活動』の初稿を完成させた[(8)]。しかし、李鋭によると、1953年よりその内容を雑誌『中国青年』に連載を開始した際、第1章に相当する「学生時代」のかなりの部分と第2章に相当する「五四運動前後的革命活動」のいくらかの部分を圧縮せざるを得なかった。そこで1957年に一冊の著作として中国青年出版社より刊行した際には、それら圧縮した部分を元に戻した上で、さらに加筆修正を行ったのだった[(9)]。

李鋭の著作の特徴の一つとして、『毛沢東同志的青少年時代』にはない細かな事実の発掘に努めていることが挙げられる。そしてそのなかで、『新青年』と毛沢東との関係についても言及し、毛沢東が熱心な読者であったこと、陳独秀と李大釗の文章を特に愛好していた点を紹介している。このほか、呉虞の文章を愛読していたことも指摘されているが、『新青年』に親しんでいたのならば当然言及されても不思議ではない胡適の名前は、この箇所では挙げられていない[(10)]。

さらに奇妙なのは、同書に次のような叙述が見られることである。

『湘江評論』創刊号が北京に届いてのち、李大釗同志はこれは当時の全国で最も内容

があり、見解が最も深い刊行物だと考えた。『毎週評論』は直ちに紹介を行い、『湘江評論』は自身の友人であって、「武人統治の下で、このようなよき兄弟を得たのは、我々にとっては本当に意外な喜びである」とした[11]。

『毎週評論』による『湘江評論』の紹介とは、「介紹新出版物」(『毎週評論』第36期、1919年8月24日）に掲載された内容を指している。李鋭の手になる上記の説明を読むと、李大釗がこの紹介を書いたように見える。少なくとも、李大釗と『湘江評論』の肯定的結びつきが強調されていることは確かであろう。だが、「介紹新出版物」の執筆者は、実は胡適である。つまり、『湘江評論』を好意的に紹介したのは胡適なのであって、李大釗ではない。李鋭の説明は、胡適と毛沢東のつながりについて事実を大きくねじ曲げていると言わざるをえないだろう[12]。

Ⅱ　異なる叙述の背景

3冊の書籍の叙述の間にこうした差異が生じるのは、それぞれの書籍刊行の時期における胡適の立場が、大きく異なっていたためである。

エドガー・スノーが毛沢東にインタビューを行ったのは1936年9月のことである。1936年の胡適は、北京大学教授として学術界で重きをなすと同時に、雑誌『独立評論』の中心として言論界でも活躍を続けていた[13]。

この頃、毛沢東は抗日救国のために統一戦線の結成を訴え、共産党外部の知識人に広く協力を呼びかけている[14]。この書簡には、蔡元培を筆頭に多くの人士の名前が呼びかけの対象として挙げられているが、胡適もその一人であった。胡適に対しては、「胡適というこの二文字は、現在では既に保守的、中庸主義的、紳士派の学者の代名詞と見なされている」という辛辣な評価もあったとはいえ[15]、毛沢東が協力を求める対象として想定されるなど、1936年時点における胡適の声望は依然として極めて高かったと言える。したがって、毛沢東がスノーに語った胡適への尊崇は、決して不自然なものではなかった。

蕭三の著作が刊行されたのは1949年9月であるが、この時点における胡適の評価は、大きく様変わりしていた。抗日戦争終結後、国共内戦が深刻化するなかで、胡適は北京大学学長に就任するかたわら、中華民国憲法草案審議に国民大会大会代表団主席として加わり、また蔣介石から総統選挙出馬を勧められるなど、国民党政権の政治運営にも大きな関わりを有する存在となっていた。国民党統治下で重きをなす胡適のこうした動きは、共産党にとって好ましいものではなかったであろうが、共産党の胡適観を決定的に悪化させたのは、

胡適が北平を脱出したことである。

1948年12月、共産党の攻勢により北平陥落が迫りつつある状況下、胡適は空路北平を脱出し南京へと逃れた。のみならず、1949年4月には国民党への支援を求めるべく蔣介石の要請で訪米もしている。

一連の胡適の挙動は、共産党にとっては到底容認できないものだった。胡適に対しては、「アメリカ帝国主義の走狗」との評価が下され、戦犯に認定すべきとの声も上がった[16]。こうした人物と毛沢東との関係を、蕭三が『中国の赤い星』の肯定的叙述に沿って説明することは当然不可能であっただろう。

『毛沢東同志的初期革命活動』の刊行された1957年にあっても、状況は好転していない。むしろ、1949年以上に肯定的に言及しうる対象ではなくなっている。1948年末以来、胡適に対する批判的言及はしばしば見られたが、1950年代半ばになって爆発的に増大したためである。この背景には、1954年末に生じた胡適思想批判運動の展開があった[17]。

この運動が生じたきっかけは、胡適とかつて親交のあった人物、兪平伯が行ってきた『紅楼夢』研究に批判が寄せられたことである[18]。『紅楼夢』研究の権威である兪平伯は1954年に「『紅楼夢』簡論」(『新建設』1954年3月3日）を発表したが、これに対して山東大学中文系を卒業して間もない二人の若者、李希凡と藍翎が、「関於「『紅楼夢』簡論」及其它」(『文史哲』1954年9月1日）という文章で反応を示した。

この文章のなかで李希凡と藍翎は、兪平伯の『紅楼夢』研究は「現実主義の批評原則」と「明確な階級視点」を離れ、「抽象的芸術観点」から「『紅楼夢』の反封建という現実的意義を事実上減少させようとしている」と論難した。この批判は毛沢東の賛同を得ると同時に、「古典文学の領域において、青年たちに30年以上悪しき影響を与えてきた胡適派資産階級唯心論に反対する闘争」との意義づけも得て[19]、『紅楼夢』研究批判にとどまらない大々的な胡適批判の展開をもたらした。早速、兪平伯の『紅楼夢』研究を胡適にまでさかのぼって批判する文章も出現し[20]、胡適思想批判は本格化した。以降、多くの知識人の手によって、『人民日報』や『光明日報』などに胡適批判の文章が陸続と掲載されるようになり、さらにそれらをまとめて全8輯からなる『胡適思想批判』(生活・読書・新知三聯書店、1955–56年）も刊行されたのだった。

このような大々的胡適思想批判がなされている時期に、スノーが提示したような毛沢東と胡適との肯定的なつながりに言及することは、当然避けなければならなかった。したがって、李鋭が「介新出版物」の著者として、胡適の名前を挙げなかったのは致し方のないことであろう。だが、こうした措置は事実を明らかにゆがめるもので、今日では許容され得ない。また、蕭三のように胡適について否定的側面からのみ言及するのも、今日ではやは

り問題であろう。

これらと比較すると、『中国の赤い星』における胡適関連の叙述は信頼できるが、毛沢東と胡適の関係のすべてを説明しているわけではもちろんない。そこで以下では、毛沢東と胡適がいかなる関係を築いていたのかを直接確認していくこととしたい。

Ⅲ　若き毛沢東と胡適の交流

『中国の赤い星』にも記されていたように、若き毛沢東は『新青年』の熱心な読者であり、特に陳独秀や胡適を模範とするほど重視していた。またよく知られているように、「体育之研究」を『新青年』に寄稿してもいる(『新青年』第3巻第2号、1917年4月1日)。したがって、『新青年』さらには陳独秀や胡適といった執筆者たちの動向を毛沢東は当然注視し、特に胡適に対してはときに直接助言を求め、自らの活動を進める上でそれを大いに参考にしていた。以下、本章で取り上げる毛沢東と胡適の交流・接点については、先行研究で明らかにされている事柄も少なくないが、本稿にとり重要な点であるので改めて説明したい[21]。

1　湖南の行く末をめぐって

1918年、湖南第一師範を卒業した毛沢東は、8月に北京へ出て10月に北京大学図書館の職員として働き始めた。そしてこの頃、新民学会の面々らとともに蔡元培、陶孟和、胡適らと学術や人生観を中心とする問題について談話する機会をもった[22]。1919年4月、毛沢東は湖南省へ帰り雑誌『湘江評論』を創刊するが、督軍張敬堯の弾圧を受けて停刊に追い込まれている。だが、毛沢東はひるむことなく張敬堯を追放するべく運動を展開、その一環として請願のための代表団を率い12月に再び北京へ赴いている。さらに1920年1月15日には胡適と面会し、この問題について話し合いをもったようである[23]。なお、この件については、張敬堯が6月に湖南省から退去させられたのち、毛沢東は次のような手紙を胡適に送っている。

> 適之先生：上海からお手紙を差し上げましたが、届いたでしょうか。私はおとといに湖南に戻りました。湖南は張が去ってから雰囲気は一新し、教育界には発展の気配が満ちています。将来、湖南は先生のお力をお借りすることが多々あるでしょう。時期が来るのを待って詳細を申し上げますが、いまは多くを申しません。此頌教安[24]。

書面からは張敬堯が去ってからの湖南省立て直しの際に、胡適を頼りとしている様子が

読み取れる。なお、「教安」とは、学生が教師に手紙を送る際に使用する用語であって、毛沢東は胡適を教師として尊重していることもわかる。また、すでに失われてしまったため確認不可能ではあるが、若き日に胡適に送った手紙のなかで、毛沢東は胡適に対し「你的学生（あなたの学生）」と署名していたとも伝えられる[25]。毛沢東の胡適に対する尊敬は、きわめて真摯なものだったと言えよう。

2　留学について

毛沢東とともに新民学会創設に尽力した蔡和森と蕭子升（蕭瑜）は、1919年からいずれもフランスへ留学している。親しい友人でもあった二人のフランス留学は、毛沢東自身にも留学という問題に目を向けさせることとなったようである。結果として彼が下したのは、留学はしないという結論であったが、その際に依拠したのが胡適の見解であった。毛沢東は友人である周世釗に宛てて次のように述べている。

> 中国から国外へ出る者は数万ないしは数十万だが、優れた者は実は少ない。多数の者はどうか。依然として道理に暗く、依然としてまったくわけがわからない。これは一つの具体的な証拠である。私はかつて一度胡適と黎邵西[26]の二人に尋ねたが、彼らも私の意見に賛同した。胡適はさらに「非留学篇」という文章を作ってもいる[27]。

書面からは、この点についてもやはり胡適に相談していたとわかる。胡適はつとに、「非留学篇」（『留美学生年報』第3年本、1914年1月）のなかで、中国における新しい文明の創造を主張していた。ただし、それは留学のみに依拠して実現するものではなく、国内教育の充実が急務であるとしていた。つまり、「非留学篇」にあっては、留学自体は第一義的に重要なこととしては位置づけられていない。そしてこの見解を主要な論拠の一つとして、毛沢東は自身の留学に対する姿勢を決定したのである。留学という生涯を左右する一大事について意見を求めるほど、毛沢東は胡適を頼りにしていたのである。

3　『湘江評論』での執筆活動とデューイへの関心

上述したように、毛沢東は1919年7月14日、湖南省学生連合会の機関誌として、『湘江評論』を創刊した。『湘江評論』は第4号まで刊行され、掲載記事のほとんどを毛沢東が執筆している。

これまたすでに述べたように、胡適は『湘江評論』を好意的に紹介している[28]。特に胡適が注目したのが毛沢東「民衆之大連合」であり、次のような評価を与えている[29]。

『湘江評論』の長所は議論の方面にある。『湘江評論』第2、3、4期の「民衆的大連合」という一大文章は、眼光が遠大で議論も痛快であり、確かに先進的で重要な文章である。さらに「湘江大事述評」という一覧は、湖南の新運動を記載し、我々に限りない楽観を覚えさせる。武人統治の下で、このようなよき兄弟を得たのは、我々にとっては本当に意外な喜びである[30]。

激賞と言ってもよく、『湘江評論』に対する胡適の高い期待も伝わってくる。またこれほどまでの賛辞は毛沢東にとっても大きな励みになったはずで、胡適に対する尊敬の念を強めたことだろう。

さて、「民衆之大連合」は、「強権者」に抵抗するべく「大連合」が必要であると説いている。だがこの「大連合」は、「小連合」を基礎とするものでなければならないともいう。「小連合」とは労働種別の「小連合」や学生の「小連合」などを指しているのだが、こうした発想はジョン・デューイが1919年6月に北京で行った講演「美国之民治的発展」の主旨に近接している[31]。「美国之民治的発展」は、無数の私立結社が国民の公共観念を発達させ、国家や社会の結合に役立っている国家としてアメリカを描いていたからである。

「民衆之大連合」については、無政府主義の影響を強く受けたとの指摘もあり、確かにそれは否定できない[32]。だが毛沢東は、長沙に成立していた健学会の活動を通じデューイの教育哲学に留意し、これ以降も一再ならずデューイに言及している[33]。毛沢東のデューイに対する関心はきわめて深いものがあったのであり、「民衆之大連合」が「美国之民治的発展」に啓発されて書かれた側面があったことも認めるべきであろう。

そしてだからこそ、胡適は上述のような高い評価を与えたと考えられる。「美国之民治的発展」講演の際、胡適は通訳を務めており、この講演の内容については誰よりも通暁する立場にあった[34]。胡適が「民衆之大連合」に、「美国之民治的発展」の議論の影響を見て取ったとしても不思議ではない。

1919年4月30日から21年7月24日までの中国滞在中、デューイは精力的に講演活動を行ったが、それを熱心に支えたのがデューイの学生であった胡適であり、デューイの考えを中国の人々に伝えることに胡適は強い使命感をもっていた。「美国之民治的発展」はデューイの中国到着後まもなく行われたものであり、デューイに対する中国の人々の関心はまだ十分には高まっていなかった。それにもかかわらず、毛沢東が「美国之民治的発展」の成果に依拠していち早く「民衆之大連合」を発表したことに胡適は意を強くし、毛沢東の議論を好ましく感じたにちがいない。

ただし、そもそも毛沢東がデューイに早くから着目し得たのは、毛沢東個人の卓見では

なく、胡適の感化によるところが大きかったためと見てよい。胡適はデューイの来華に合わせて「実験主義〔プラグマティズム〕」と題する講演を行い[35]、また「杜威哲学的根本観念」「杜威之道徳教育」「杜威的教育哲学」などの文章を発表するなど精力的にデューイの紹介に努めていた[36]。尊敬する胡適のこうした尽力を通じ、毛沢東はデューイに関心を抱くようになったのだろう。

以上の点については、毛沢東も胡適も必ずしも明確に語っているわけではないので、推測にとどまらざるを得ない部分も多い。ただ、毛沢東のデューイに対する強い関心の背景に、胡適という媒介の存在を見て取ることは十分に許されよう。また、胡適の側も、デューイの議論を吸収して書かれた「民衆之大連合」に好感を抱いていたことだろう[37]。

4　問題研究会について

問題研究会は、1919年9月1日に毛沢東が中心となって成立したことになってはいるが、実際には活動はしていない。9月1日の日付をもつ同会の章程が広く人々の目に触れることになったのは、当時北京大学の学生であった鄧中夏により『北京大学日刊』に掲載されたことによる。毛沢東は章程を起草したのち、それを鄧中夏ら北京の知人たちに送付、鄧中夏はその内容を高く評価し、より多くの人に紹介したいと『北京大学日刊』に寄稿したのだった[38]。そして時期から判断して、問題研究会というこの名称は、胡適と李大釗との間で生じた問題と主義をめぐる論争に触発されて名付けられたことは疑いを容れない。

問題と主義をめぐる論争において、胡適と李大釗が直接に議論している文章としては、以下のものがある。

胡適「多研究些問題、少談些主義」『毎週評論』第31号、1919年7月20日。
李大釗「再論問題与主義」『毎週評論』第35号、1919年8月17日。
胡適「三論問題与主義」『毎週評論』第36号、1919年8月24日。
胡適「四論問題与主義」『毎週評論』第37号、1919年8月31日。

問題研究会発起以前、毛沢東が以上四篇の文章のうち、いずれの文章を読んでいたのか確定するのは困難とはいえ[39]、「多研究些問題、少談些主義」を読んでいたのは確実であり、したがって問題研究会の発起はかなりの程度、胡適の文章の影響を受けていた。

よく知られているように、問題と主義をめぐる論争では、胡適が主義を高談することの害を指摘している。たとえば、人力車夫の家計を研究せずに社会主義を高談する、南北問題〔北京政府と広東軍政府の分立・対峙〕をいかに解決するかを研究せずに無政府主義を

高談する、そしてそうした高談を「我々が語っているのが根本的解決なのである」と得意満面に語ってみせる態度を、胡適は「中国思想界の破産の動かぬ証拠」「中国社会改良の死刑宣告」であると切って捨てた[40]。目の前の具体的な課題の研究を欠いた主義の提唱を、胡適は徹底的に退けたのである。

これに対して、李大釗は「一方では確かに実際的問題を研究しなければならないが、もう一方では理想的主義も宣伝しなければならない」と問題と主義の不可分な性質を強調しつつ、「我々があれやこれやの主義を工具とし実際の運動に用いさえすれば、その工具としての主義は時、場所、事柄の成立や状況によって、環境に適応するべくある種の変化を生じるはずである」と述べ、主義を現実を変革するための手段として用いることを強く志向している。なお、李大釗が述べる主義とは具体的にはボリシェヴィズムのことであり、彼は「経済問題の解決」という「根本的解決」を通じてこそ、「個々の具体的問題が解決する希望が存在する」と主義に支えられた根本的解決の必要も説いてみせた[41]。

以上をふまえて章程の内容を確認しよう。全体を通じて直ちに明らかであるのは、章程が「実地調査」を重視していることである。だが、それはあくまで調査なのであって、調査を積極的な実行に結びつけることに毛沢東は慎重である。章程第8条が「問題研究会は、「学理により問題を解決する」ことに限定する。「実行により問題を解決する」ことは、問題研究会の範囲外に属する」としているからである[42]。

問題の研究の際に「学理」を重視することを説いていたのは胡適であり、第8条の言い回しからして毛沢東は胡適の見解を参照したのだろう[43]。また、「実行により問題を解決する」ことへの慎重な態度は、毛沢東が李大釗の見解とは事実上距離をとっていることを示している。したがって、毛沢東が問題研究会の発足を思い立ったのは、胡適の議論に感化された部分が何より大きいと判断できよう。

なお附言しておくと、蕭三が問題と主義をめぐる論争における胡適の姿勢を酷評したことはすでに見たとおりだが、李鋭も同様の整理を行っている。胡適思想批判運動の影響下で整理された李鋭の叙述は、「毛沢東同志は李大釗同志が提出した「問題と主義は分けられない」という基本論点に立った」としており、上述の実情とは大きなずれを見せている[44]。

Ⅳ　共産党員毛沢東の胡適観

1　1920年代

中国共産党員として本格的な活動をするようになって以降、毛沢東は胡適に対してどのような見方を示していたのか。まず手がかりとなるのは、毛沢東が雑誌『新時代』に掲載

した「外力、軍閥与革命」(『新時代』創刊号、1923年4月10日）である。

この文章のなかで、毛沢東は国内の各派勢力を「革命的民主派」「非革命的民主派」「反動派」に分類している。「革命的民主派」は国民党を指し、共産党もここに含まれる。「非革命的民主派」は、研究系、胡適や黄炎培ら新興の知識階級、および聶雲台や穆藕初ら新興の商人を、「反動派」は、直隷派、奉天派、安徽派を指す。

毛沢東の見通しでは、今後の中国政治は「革命的民主派」と「非革命的民主派」が、「反動派」打倒のために協力して、「大きな民主派」を形成する。「国際資本帝国主義」の干渉もあって、当面は「反動派」の「天下」が続くが、いずれは民主派が勝利するというものである。ちなみにこれは、のちの「新民主主義論」における位置づけとは異なる見通しである。

注目すべきは、胡適を新興の知識階級の代表として位置づけ、協力して軍閥打倒に進むべきと主張していたことである。当時、胡適に対しては、陳独秀や蔡和森ら中国共産党の人士から痛烈な指摘が相次いでおり、たとえばその好人政府の主張については、「北洋派武人勢力」を排除せぬまま好政府を組織できると考えるのは、「あまりに空想的で、あまりに滑稽で、さらにはあまりに努力不足であることを免れない」との批判が寄せられていた(45)。また、連省自治の主張についても「完全に武人割拠という欲望の上に建設されており、人民の実際の生活の必要の上に建設されたものでは決してない」のであり、連省自治の実態は「連督割拠」を擁護するものにほかならない、といったきわめて辛辣な評価が下されていた(46)。しかし、毛沢東は胡適に対しそのような厳しい言辞を投げつけることはない。

毛沢東が胡適を批判せず協力の対象とした要因として、当時の中国共産党の胡適評価との関係がまず考えられる。陳独秀らは胡適の構想を真っ向から否定したものの、「新派を称する蔡元培、梁啓超、張君勱、章行厳〔章士釗〕、梁漱溟らは、もとより王敬軒、朱宗熹、辜鴻銘、林琴南〔林紓〕らのように道理に暗くはないが、しかし依然として封建宗法の思想の上に片足を立て、もう一本の足あるいは半分の足は近代思想の上に立っている。本当に近代資産階級の思想文化を理解しているのは、胡適のみである」と評価し、そこから「適之が信じる実験主義と我々が信じる唯物史観は、自ずと大きく同じではない点があるが、封建宗法思想を掃討するという革命戦線の上にあっては連合の必要があるのだ」と胡適を連合すべき対象として認識していた(47)。また、胡適と李大釗、陳独秀との間には、『新青年』時代から継続する密接な関係が存在しており、このことも中国共産党が胡適を協力者と見なしうる余地を生んでいた(48)。こうした状況は、毛沢東の胡適評価にも当然影響を及ぼしていたはずで、胡適を協力相手として想定する毛沢東の主張は何ら奇異なものではない。

また、毛沢東に特有の事情も存在していた。「外力、軍閥与革命」が掲載された『新時代』は、毛沢東が創設に参与した湖南自修大学の校刊であり、湖南自修大学創設には胡適も関わりをもっていたのである。

湖南自修大学とは1921年8月に毛沢東らによって開設された学校であり、設立の準備段階で毛沢東は、「私は私たちが長沙において新しい生活を創造しなければならず、そのために同志を集め家を借り自修大学を運営できると考えている（この名称は胡適先生が付けたものである）」と、自修大学の名称が胡適の発案になるものであることを明らかにしている[(49)]。胡適の助力も得て創設された自修大学の校刊に掲載した論説において、胡適に対する批判をわざわざ展開する必要はないと毛沢東が考えるのは至極当然のことだった。

2　1940年代以降

1910年代末から20年代初頭にかけて、胡適は毛沢東に行動の指針を提供する存在であった。しかし、20年代半ば以降、胡適への積極的な言及は見られなくなる。30年代においてはスノーのインタビューや蔡元培宛の書簡で言及したほかは、胡適の名前を挙げることはほとんどなかったように見受けられる。中国共産党内で自身の存在感が強まり自信を深めるにつれ、かつて多大な影響を受けた胡適について、積極的に参照・言及する必要はなくなったということなのだろう。

事情が変わったのは、人民共和国建国前後になってからである。1948年秋、人民解放軍が北平を包囲した際、北京大学校長胡適に対して、蔣介石の下に走らないこと、そうすれば将来、北京大学校長と北京図書館館長の職務を任せるとの呼びかけがなされたようである[(50)]。1947年12月の日付をもつ陳毅のメモによると、毛沢東は胡適を図書館長にしてもよいと述べていたから、毛沢東の意向を反映しての呼びかけである可能性も高い[(51)]。しかし、すでに述べたように胡適は結局のところ北平を退去したから、毛沢東は大いに気分を害したことだろう。

1949年になると、毛沢東によって胡適に対する手厳しい批判が直接明示されるようになる。具体的には、帝国主義やその手先である中国の反動政府の支配下に堕したごく少数の人士の一人として、胡適の名前を傅斯年、銭穆の名前とともに毛沢東は挙げている[(52)]。これは1949年8月5日に発表されたアメリカ国務省の米中関係に関する白書、およびそれに先立つアチソン国務長官によるトルーマン大統領に宛てた関連書簡に対する反応のなかでなされた。白書と書簡に対して毛沢東は激しく反発し、アメリカ帝国主義による中国政策を糾弾する文章を立て続けに発表している[(53)]。このときアメリカに滞在していた胡適の動向にも毛沢東は神経をとがらせ、胡適を名指しで批判したのだろう。

そして50年代には、兪平伯への批判を毛沢東が大規模な胡適思想批判運動へと発展させたことは上述したとおりである。

だが、以上の経緯から毛沢東が胡適批判一辺倒であったかというと、事実はそうではない。それは、1956年2月のある宴席における毛沢東の発言から窺われる。この宴席に出席した唐弢は、毛沢東が胡適について、「実際のところ、新文化運動において彼は功績があったのであり、すべてを消し去ることはできない。実事求是であらねばならない」「21世紀が来て、そのときになれば彼のために名誉を回復しよう」と述べていたことを紹介している(54)。

唐弢は、「私は近代文学を研究しているので、この一連の話の印象は特に深かった。〔ここで紹介した〕一言一句がすべて〔毛沢東の〕元の発言の通りであると保証はできないにしても、しかし元々の意味から大いにかけ離れているわけでもない。なぜなら、これ以後の数年間、それらの言葉はずっと私の脳裏を旋回しており、それは何度も何度もであったからである」と附言しており、毛沢東による胡適評価が脳裏に焼き付いていたようである。毛沢東が大略こうした内容のことを述べたのは、間違いのないところであろう。

以上の発言において、毛沢東は胡適の功績を確かに認めてはいる。しかし別の見方をすれば、自身の存命中は胡適の名誉回復は許されないとの意向を示唆しているようにも見て取れる。実際のところ、毛沢東の存命中、胡適に関する「実事求是」に基づく研究は進まず、名誉回復もなされなかった。

Ⅴ　胡適の毛沢東観

1　公開書簡と日記の記述

上述したように、胡適は『湘江評論』について高い評価を下していたが、これを除くと毛沢東に関する記述は長きにわたりほとんど見受けられない(55)。胡適からすれば、毛沢東は自分を慕う数多くの若者の一人に過ぎなかったのだろう。だが、毛沢東が中国共産党の指導者として存在感を示すようになると、毛沢東に関する記述が増えていくことになる。

1945年7月、傅斯年や黄炎培らが延安を訪問し毛沢東と会見した。この際、毛沢東は傅斯年に当時アメリカ滞在中だった胡適に挨拶を伝えるよう依頼した。これに対し、胡適は1945年8月24日付けの書簡で応答している(56)。このなかで胡適は毛沢東に対し、武力を放棄し武力に依拠しない第二の政党を結党するよう要請している。そしてアメリカの民主党やイギリスの労働党の事例に言及しつつ、平和的発展の道を選択すれば、将来的に毛沢東の政党が政権を担える可能性があることを示唆した。

胡適は1954年になってこの書簡に言及し、「私のかつての学生、毛沢東」に電報を転送したのだが、「当然私は今日にいたるまで返信を受け取っていない」と振り返っている[57]。そして、「実際、理想主義が澎湃として沸き起こっていた当時の日々において、私と国内政治・国際政治の素人たちは、一様に無邪気であった」と反省の弁を述べている。確かに、1945年から54年までの中国政治の展開を考えると、自分の見通しはあまりに無邪気であったと胡適は考えざるを得なかっただろう。

1945年の書簡は当時『大公報』（重慶）など複数の新聞に公開されたものであり[58]、中国政治の有り様および多くの人の利害に関わる言論であったのに対して、1951年になされた毛沢東に関する次の言及はそのようなものではない。日記のみに記載されたはるかに規模狭隘な述懐である。それは、毛沢東が立ち上げた自修大学に関するものである。

> 毛沢東は私が1920年に行った自修大学の講演に依拠して、湖南第一自修大学章程を起草し、私の家に持参して私が点検し改正することを求めた。彼は長沙に帰らねばならず、船山学社を自修大学の住所とすると述べた。数日経って、彼は私の家に章程の改稿を取りに来た。しばらくして、彼は南へと去っていった。自修大学の記録は、この2箇所にのみ見えるようなので、私はここに記しておくものである[59]。

胡適の記すこの2箇所とは、胡適自身が説明するように蕭三「毛沢東的初期革命活動」（同『毛沢東故事選』新華書店、1945年）と、胡華編『中国新民主主義革命史』（新華書店、1950年）である。そしてこの2冊は、自修大学と胡適との関わりについて記していないのである。

些細と言えば些細な言及に過ぎないが、人民共和国において毛沢東の生涯がどのように叙述されているのか、さらにそのなかで自身と毛沢東との関わりがどのように説明されているのかについて、胡適が非常に気を配っていることが伝わってくる叙述である。そして、「自修大学の記録は、この2箇所にのみ見えるようなので、私はここに記しておくものである」との胡適の但し書きからは、必ずしも明示しているわけではないものの、胡適が人民共和国における現行の説明に引っかかりを覚え、不満を抱いている様子が伝わってくる。

2 “My Former Student, Mao Tse-tung”（私のかつての学生、毛沢東）

日記に以上のように記載した直後、あるいは執筆自体はほぼ同時期ではないかと推測されるが、胡適は毛沢東についてより直接的に言及している。それは、イギリス出身の著述

家ロバート・ペインの手になる毛沢東伝、*Mao Tse-Tung: Ruler of Red China*（New York: Henry Schuman, 1950）に対する書評 “My Former Student, Mao Tse-tung” においてであった[60]。

ペインは毛沢東のほかにも孫文、マルクス、レーニン、スターリン、トロツキー、ヒトラー、ガンディーなど数多くの人物の伝記を書いたことで知られるようになるが、それはのちのことであって、毛沢東伝発表以前は孫文伝を発表していたに過ぎない。だが、ペインは1941年から1946年にかけて在中国イギリス大使館に勤務、西南連合大学の教壇にも立ち、*Chunking Diary*（1945）や *China Awake*（1947）といった著作をものすなど中国と深い縁をもっていた。ペインの毛沢東伝は、毛沢東が中国の指導者として振る舞うようになった直後に刊行されたこと、またペインが1946年に延安で実施した毛沢東へのインタビューが含まれていることから[61]、胡適の注意を大いに引いたのであろう。

ペインの著作に対するこの書評は、胡適の毛沢東に対する評価も示しており毛沢東と胡適の関係を考察する上で、当然注目されてもよいものである。だが、この一篇はこれまでの研究でほとんど留意されておらず[62]、中国本土で刊行された『胡適全集』（安徽教育出版社、2003年）や周質平編『胡適英文文存』（全3冊、外語教学与研究出版社、2012年）には収録されていない。周質平編『胡適英文文存』（第3冊、遠流出版公司、1995年）に、つとに収録されていたにもかかわらずである。

“My Former Student, Mao Tse-tung” が掲載されたのは、ジャーナリストのジョン・チェンバレンやヘンリー・ハズリットらが中心となって1950年に創刊されたアメリカの雑誌 *The Freeman* である[63]。同誌は反共を基調としていたから、胡適による書評も毛沢東や中国共産党に対してまったく好意的ではないことは容易に想像がつく。とはいえその筆鋒は、想像を超える鋭さを有している。そのため、『胡適全集』などへの収録が見送られ、結果として先行研究でも活用されてこなかったのだろう[64]。

さて、この書評の冒頭で、胡適はエドガー・スノーの *Red Star over China*、蕭三「毛沢東同志的初期革命活動」[65]、同『毛沢東同志的青少年時代』を読み込んでいると記している。また *Red Star over China* については中国語版である『西行漫記』をも読み、原著との間に相違点があることを説明している。その説明によると、原著は中国共産党第1回全国代表大会の中央委員会のメンバー8名の名前しか挙げていなかったが『西行漫記』はさらに4名の名前を挙げ、また原著が “Sun Yuan-lu” と誤って記載していた人名を『西行漫記』は沈玄廬と修正するなど、いくつかの有益な加筆・修正が見られるという[66]。蕭三『毛沢東同志的青少年時代』については、長沙や湘譚の地理について興味深い詳細を提供していることを除いて、スノーの叙述に特に何かを付け加えているわけではないと低い評価を下している。以上から明らかなように、胡適は毛沢東の各種伝記を子細に検討し、内容の丁寧な

把握に努めていたのである。それだけ、毛沢東の事績、そしてそれがどのように描かれているのかに強い関心をもっていたと言える。さらに胡適は次のようにも述べている。

> 十分な長さを備えた毛沢東の伝記を執筆しようとする作者で、しかし毛沢東の膨大な演説と記事を分析するための忍耐をもたず訓練を経ていない者は、誰でも惨めな失敗を運命づけられる。彼はスノーの記録をその膨大な小さな誤りとともに使用すること〔誤りに留意しつつ注意深く使用することという意味であろう〕、さらに蕭三によってスノーを補足するよう強いられる。そして〔このようにしてできあがった〕この複合物に、忍耐強い研究の結果ばかりだけではなく、大胆な想像からなる努力に裏打ちされた創見をも付け加えるよう強いられるのである[67]。

毛沢東の各種著述や伝記について、人後に落ちぬ理解を有していると自負していたからこその言明であり、この評価基準からペインの著作は吟味されることになった。

そしてこの基準に照らすと、ペインの毛沢東伝は甚だ不出来な作品であった。胡適の見るところ、ペインの毛沢東伝は中心的な部分でスノーの叙述に依拠しているが、『西行漫記』を参照していないために多くの誤りが正されていない。またペインは著作の執筆に当たり蕭三と長時間の議論を行っているが、蕭三の「毛沢東同志的初期革命活動」と『毛沢東同志的青少年時代』を参考文献としては記載していない。その結果として、それらを除いたこの著作の残りの部分は、「ペインによる苦心に満ちた水増し」となった。胡適はこの点について、「若い著者が、中国に関する痛ましいまでに乏しい知識の蓄積を拡張し、どうしようもない著作の頁を埋めようとするのを目にするのは実に苦しい」とまで述べている[68]。また、そもそもペインが中国語を正確に読めているのか疑わしいとすら感じていた。以上をふまえて、胡適はこの著作が多くの誤りやでたらめに満ちた「無知で無責任な本である」と最終的に断定したのだった[69]。加えて、「整頓党的作風」「反対党八股」「在延安文芸座談会上的講話」「目前形勢与任務」「論人民民主専政」といった毛沢東の著述のなかでもとりわけ重要なものを十分に活用していないことも、こうした否定的評価に拍車をかけた。

特に胡適が不満であったのが、ペインが「論人民民主専政」という「中国の現在の体制の独裁的かつ専制的な性質を最もよく説明し、また小学校から大学までのすべての教員と学生が読むことを求められている」著述を完全に無視していることであった。胡適は「なぜ彼〔ペイン〕は彼の読者に対し、4億人の人々がその下でいま現在生活し苦しんでいる国家と政府の専制的性質について、最も流ちょうかつ露骨に示しているこの解説〔「論人民民主専政」〕をこれほどまでに提示したがらないのか」との疑問を呈している[70]。この叙

述からは、胡適が毛沢東統治下の中国について、独裁的かつ専制的で、多くの人が苦しみの下に置かれていると考えていたことがわかる。なお、以上の欠点をもつペインの著作への評価は後年になっても変わることはなく、「彼は、まったく毛沢東のことを知らないのに毛沢東の伝記を書いた。〔それは〕完全に商業化された投機的かつ下品な代物であり、完全にでたらめである」と改めてこき下ろしている(71)。

Ⅵ　毛沢東への強い関心の背景

1　陳垣の書簡

胡適がこれほどまでに毛沢東に関連する叙述に強い関心を寄せたのは、現実の政治に深い関心を抱き続けてきた中国の知識人の一人として、新しい中国の指導者になろうとしている毛沢東が、大きな関心を引く存在であったからであろう。ただし、胡適には、毛沢東を人一倍注視せざるを得ない個人的事情も存在していた。

それは、胡適を対象とした批判が中国共産党の下で展開していたことである。まず胡適に大きな衝撃をもたらしたのが、高名な歴史家で輔仁大学校長でもあった陳垣による書簡が1949年5月に公開されたことである(72)。

この書簡のなかで陳垣は、胡適が「共産党がやってくれば、決して自由はない」と告げていたこと、しかし実際に共産党がやって来ると、「本当の人民の社会、歴史上存在しなかった新しい社会を目にすることができた」と述べ、胡適の認識が完全に誤っていると糾弾している。また、胡適がこの書簡の発表当時アメリカに滞在し、国民政府への支援を訴えていたことについても、「あなたが依然としてアメリカ帝国主義と中国の国民党反動統治政権との橋渡し役を担っていること〔中略〕、これには驚きを禁じ得ない」と突き放した(73)。

陳垣の語るところでは、彼がこのような新しい認識を抱くにいたったのは、『毛沢東選集』所収の複数の文章により毛沢東思想を理解したこと、『西行漫記』により老解放区に十数年前の時点ですでに優れた政治が布かれていたこと、『蕭軍批評』〔正確な書名は『蕭軍思想批判』〕により自身も含めた小資産階級知識分子が犯しやすい誤りについて理解したこと、による。『西行漫記』については、その文章の価値は『水滸伝』をはるかにしのいでいると激賞もしている。

尊敬する陳垣から辛辣をきわめる内容の書簡を送られて、胡適としてはそれに無言でいるわけにはいかなかった(74)。胡適は書簡を子細に読み込んだが、陳垣の書簡に大きな問題が含まれていることを見いだし、その点を中心とした反論を『自由中国』に公表している(75)。

胡適によると、陳垣の公開書簡に用いられている複数の語句や文法は、白話文を書いて

こなかった陳垣では決して使用しないはずのものである。ただし、内容面では陳垣しか知り得ないことも記されているため、陳垣が求められて執筆したのち、共産党麾下の文人が白話文ですべてを書き直し、さらには宣伝的文章を多く加筆したのだろうとの推測を胡適は下している(76)。

陳垣の学習の実態についても胡適は検討を加えている。まず、『西行漫記』が『水滸伝』を凌駕するとの評価については、あまりに過度な評価であると苦言を呈している。また、蕭軍はソ連軍侵入下における東北人民の苦しみを目の当たりにし「やむにやまれず道理にかなった話を婉曲に執筆した」。だが結果として、中国共産党の怒りに触れ激しい批判を浴び、自らの誤りを認めるよう強いられたのである。したがって、『蕭軍批評』〔『蕭軍思想批判』〕は、「鶏を殺して猿に警告するような書籍」にほかならない。そのような書籍を70歳を超えた陳垣に称揚させるということは、「これはまさに共産党が彼らの統治の下では、決して自由がなく、決して言論の自由がなく、また決して話をする自由がないことを自ら認めている」ことにほかならなかった。

胡適がこのように反論したからといって、彼に対する批判が沈静化することはなかった。

たとえば1951年には、北京大学文学院と法学院で「胡適思想問題」が討論され、また中文、哲学、史学、図書館の4つの系の合同で「控訴会」が開催されている。この会には俞平伯、顧頡剛、湯用彤、朱光潜ら胡適と親交のあった人々も参加して胡適批判を展開していた(77)。

胡適も、自身に対しこうした批判がなされていることを明確に認識していた(78)。胡適の分析では、これは彼らの自発的意思によるものではなく、「非人間的環境の生活のなかで、迫られてこのようにしているのである」(79)。このようにして胡適は、知識人にここまで強いる共産党、そしてその指導者毛沢東を注視していくことになった。なお、陳垣は、胡適が『水経注』の研究をする際、40種以上におよぶ版本を収集し分析に注力したのに対し、政治に関しては「なぜ蔣介石の本のみを見て、毛沢東の本には注意しなかったのか」と皮肉っている(80)。胡適がこれ以前、毛沢東の著述にまったく注意していなかったとは考えられないが、こうした挑発的言辞も胡適による毛沢東自身の著述や伝記的著述への執拗とも言える関心を喚起する役割を果たしたことだろう。

2　胡思杜の声明

陳垣の批判以上に胡適にとり衝撃的であったのが、1950年9月に次男である胡思杜の声明が出されたことであろう(81)。胡適の北平脱出に胡思杜は同行せず、新たに成立した人民共和国にとどまっていた。そのため、周囲で展開されるようになった胡適批判にも当然巻

き込まれることとなった。

胡思杜は当初、自らの父親がなぜ人民共和国において激しい批判にさらされているのか理解できなかったが、「検討会」や各種文献の学習を通じて、自らの誤りを悟るにいたった。そして問題と主義論争などにおける胡適の姿勢に言及しつつ、胡適を「比べるもののないほどの軟弱な資産階級知識分子」と指弾するようにまでなった(82)。

胡思杜の指弾に対しては、胡適ではなくその学生にして盟友でもあった傅斯年が、直ちに猛烈な反論を発表している(83)。歯に衣着せぬ物言いで知られた傅斯年の言明は、きわめて直截である。

傅斯年は胡思杜の学業が不振で、同年の者が大学に進んでいたときに初級中学を卒業していなかったこと、学問にそもそも関心を抱いていなかったことまでをも指摘しつつ、「私の見方は、この人物は学業を達成できず世事も理解していないが、しかし天性は決して酷薄ではない」との評価を示している。したがって傅斯年の見るところ、胡思杜の声明は胡思杜自身の手になるものではあり得ない。「比べようのない軟弱な知識分子」といった表現は、「完全によくある共産党の語調であって、思杜のような愚か者がその人生で書き出すことも夢想することもないものである」。また、胡思杜による「より反動的なのは、ソヴィエト区が圍剿されていた際、彼〔胡適〕が好人政府を高らかに呼びかけていたことだ」との文面を捉えて、江西省ソヴィエト区の圍剿の際、「思杜は小学校の段階で、さらに病で臥せっていた」と傅斯年は指摘している。当時の事情を知るよしもない胡思杜が、記せるはずもない事柄だというのである。ここから傅斯年は、胡思杜による批判は胡適の指摘する陳垣の事例と同様、共産党が胡思杜の名義を利用して執筆したものにちがいないと結論づけた。

一方、当時アメリカに居住していた胡適は、『ニューヨーク・タイムズ』に「このニュースは非常に興味深いが、それによってひどく困惑するようなことはない」「ご存知のように、私の息子は大陸にとどめ置かれている。彼の今回の声明は私が常に強調してきたこと、つまり共産主義国家には沈黙の自由がないということを裏付けるものだ」とのコメントを寄せている(84)。次の日の関連記事で、胡適はこの記事の執筆者から、「思想と行動の真の自由を体現している」「真に独立した個人、そして偉大で名誉ある人物として、彼〔胡適〕は彼ら〔中国共産党〕からの敵意に誇りをもつ権利を有している」と称賛され、だからこそ共産党から息子をも動員するような激しい批判を浴びていると評されていた。息子からの批判について「ひどく困惑するようなことはない」とし、「共産主義国家には沈黙の自由はない」と言明する胡適の対応は、以上のようなアメリカでの評価に確かによく適合している。

しかし、「ひどく困惑するようなことはない」という胡適の反応は、あくまで表向きのも

のであったように見て取れる。困惑していないというのであればこの件を黙殺してもよさそうだが、胡適は胡思杜による声明が掲載された『大公報』(香港) や上述の『ニューヨーク・タイムズ』の関連記事の切り抜きを日記に貼り付け、また息子の消息をその後も気にかけ続けていたからである[85]。

この件ののち程なくして胡思杜は唐山鉄道学院講師に就任したが、反右派闘争で右派と認定され激しい批判を受けるなか精神に異常を来し、1957年9月に自殺したとされる[86]。胡思杜が迫害を受けているらしいとの情報は香港経由で胡適にも伝わっており、自殺したとの報道があることも胡適は承知していた。そしてそうした報道から、胡思杜が迫害されていることは疑いないと胡適は考えていた。とはいえ、自殺したかどうかについては確証がもてなかったようで、1958年5月の時点ではそれは悪意ある噂ではないかとの推測も示している[87]。だが、同時期に「絶望的な状況であっても、最後まで希望を捨てずに努力する」とも述べていたようであり[88]、胡思杜の運命が楽観を許さないものだと覚悟していたのだろう。

上述したように、胡適は陳垣に対しては詳細かつ辛辣な文章を中国語で発表し、正面から反論した。それと比較すると、胡思杜に対する反応は積極さに欠ける。反応を示したのは英語の媒体上であり、かつそれは自ら文章を執筆するのではなく記者の質問に答えるかたちであったからである。

こうした違いが生じたのは、激しい反駁を正面から行った場合、胡思杜に危害が及ぶ可能性を胡適が危惧したからかもしれない。とはいえ、ただ黙って見過ごすわけにももちろんいかなかった。そこで胡適が選択した抵抗の方法の一つが、自身と毛沢東の関係を整理しつつ毛沢東に対する評価を行い、場合によってはそれによって毛沢東への牽制を試みることだった。そのために、胡適は毛沢東への関心を抱き続けることになったのである。

Ⅶ　胡適思想批判運動への対応

こうした抵抗の姿勢が顕著に表出したのが、胡適思想批判運動においてである。この運動は多くの知識人を動員したもので、すでに述べたように、彼らによって書かれた胡適批判のための文章が最終的に全8輯にまとめられるほどであった。胡適はそれらを熱心に読んでいたが、唐徳剛によると「当然のことだが、胡先生はこの百十万字の「批胡」の名著のなかに、彼のかゆみに手の届くものは一篇たりともないと考えていた。彼は読めば読むほど、彼らが彼を「批判」しきれていないと感じていたのである」とのことである[89]。そして胡適は、この熱心な研究の成果を「四十年来中国文芸復興運動留下的抗暴消毒力量――

中国共産党清算胡適思想的歴史意義」としてまとめようと尽力した[90]。完成・公表されることはなかったものの、その中心的内容は胡適の生前、新聞記者王洪鈞の手により『中央日報』に掲載されている[91]。なお、「四十年来中国文芸復興運動留下的抗暴消毒力量」は『胡適手稿』（第9集巻3、胡適記念館、1970年）や耿雲志主編『胡適論争集』（下巻、中国社会科学出版社、1998年）にはつとに収録されているが、『胡適全集』（安徽教育出版社）には収録されていない。以下述べるように、その内容が中国共産党にとってはあまりに批判的であり、そのために収録が見送られたのであろう。

この長大な一文のなかで、胡適は最近の人民共和国における思想運動を、「序幕：清算俞平伯的『紅楼夢』研究」「中幕：清算胡適的幽霊」「終幕：胡風和胡風集団」とし、各々の批判を密接な関連を有したものとして位置づける。そしてこれらの思想運動を「大規模な洗脳運動」と呼びつつ、それには一つの歴史的意義しかないとする。それは、約40年前に開始された「中国文芸復興運動」が、「意外にも少なからざる抗毒防腐の力を養成し、また明確に残していたことである」[92]。洗脳が執拗になされているのは、この運動の成果がそれだけ強力であることを示しているというのである。

ここで胡適は、「中国文芸復興運動」を「新思潮運動」や「新文化運動」とも呼ばれると紹介しつつ、さらに「中国文芸復興運動」の「最も普遍的な、しかし最も不正確な名称」として「五四運動」という名称を挙げ、この呼称への嫌悪感を隠そうとしない[93]。これは、五四を重大な画期としていた毛沢東への反発に由来するものであろう。毛沢東は「新民主主義論」において、「五四以前には、中国の新文化運動、中国の文化革命は、資本家階級が指導したもので、彼らはまだ指導的役割を果たしていた。五四以後、この階級のもつ文化思想は、その政治面におけるものと比較してさらに落後し、指導的役割を完全に失った。革命の時期に同盟者となるのが関の山であって、盟主の資格は必然的にプロレタリア文化思想の肩にかかってこざるを得ない」と整理し[94]、胡適も含めた知識人の貢献を低く評価していた。こうした「五四運動」の名称の下では、自らも含めた「文芸復興」への努力が矮小化されてしまう。これは胡適にとっては到底受け容れられないものだった[95]。

胡適の見立てでは、彼自身が特に批判の対象とされているのは、この運動に彼が一貫して携わってきたからである。そして共産党による徹底した攻撃は、自身のために大規模な宣伝をしてくれているようなものだとの余裕すら見せ、自身は痛痒を感じていないとも記している。胡適は胡適思想批判運動の担い手たち、そしてそれを事実上主導している毛沢東に対し、自身はまったく打撃を受けていないと宣言しようとしていたのである。ここからは、自身の家族や友人を動員しての批判は無意味であるとの胡適の念を読み取ることができよう。

結　論

すでに触れたように、胡適は人民共和国成立以降、「私のかつての学生、毛沢東」という言い回しをほかの人々の目にも触れるかたちで用いることがあった。しかし、毛沢東が胡適の学生であったとするのは形式的にも客観的にも首肯しにくい見解である。毛沢東はかつて確かに胡適に師事していたが、当時の胡適が毛沢東を自分の学生として明確に認識していたかは疑わしく、自分を慕う多数の若者のなかの一人としてしか見ていなかったというのが事実に近い。胡適が毛沢東という個人の存在をはっきりと意識するようになったのは、時代が下って毛沢東が中国の有力者として台頭するようになってからのことであり、そのときになって若き毛沢東との交流が鮮明に思い出されたとするのが妥当である。

それにもかかわらず、胡適が「私のかつての学生、毛沢東」と述べるようになったのは、中華人民共和国の指導者として友人や息子の胡思杜を迫害するほどの権力を行使するようになった毛沢東が、かつては胡適を師として仰ぐ学生に過ぎなかったという事実を明示したかったからだろう。これは毛沢東や彼を尊崇してやまない人物にとっては、都合の悪い事実である。この都合の悪い事実を突きつけることで、毛沢東を尊崇する人々そして毛沢東自身の行き過ぎを牽制しようとの意図をここには見て取ることができる。

興味深いことに、毛沢東はこの胡適の言い回しに応答するかのような反応を1957年に示している[(96)]。毛沢東は「過去の胡適への批判は大きな成功を収めた」と述べた上で、「胡適を完全に消し去ることはできない」、なぜなら「彼は中国の啓蒙運動に対して、働きをなしたからだ」と一定の評価をしている[(97)]。胡適が主張するところの「中国文芸復興運動」への貢献を毛沢東自身も認めているかのようであり、押しも押されもせぬ中国の指導者となった余裕すら感じさせる。ただし、胡適が毛沢東を学生と呼称していることは気に障ったようで、次のように述べている。

> 胡適は、私が彼の学生だと述べている。彼が教授であったとき、私はしがない一職員であり給与は同じではなかった。とはいえ、私は彼の学生ではない。現在、胡適の名誉を回復する必要はなく、21世紀になってからこの問題は再度研究すればよいだろう。

毛沢東は自身が胡適の学生ではなかったと明確に否定する一方、かつて胡適を尊敬しその助言を求めていたことには一切触れていない。毛沢東からすれば、批判の対象と認定した胡適に師事していたと認めることは不都合である。こうした不都合な事実の提示は胡適

による牽制ではなかったかと指摘したが、毛沢東はそれをはっきりと拒絶したのだった。また、毛沢東としては、自身が指導者になった途端、学生であったと突然言われても、甚だ不愉快・迷惑でもあっただろう。

毛沢東の言葉に従うならば、21世紀となった今日においては、胡適について単なる批判のためではない「実事求是」の観点に立った研究が可能なはずで、実際に多くの研究が中国語で発表されていることは冒頭で述べたとおりである。それにもかかわらず、毛沢東と胡適との関係については、本稿で指摘したように、ゆがみを直視しないという問題、さらにはそれと関連して十分に顧みられない史料が残されていた。しかし、「実事求是」は当然ながらこうした点にもおよぼされるべきであり、そのようにしてこそ毛沢東と胡適の関係を十分に考察することにつながっていくだろう。

【付記】本稿は、科学研究費補助金（15H03251）による研究成果の一部である。

註

(1) 中国語では学術論文の体裁を取らないものも含め、多くの著述がある。本稿では、徐京・施昌旺「毛沢東与胡適交往関係述略」（『安徽大学学報』（哲学社会科学版）1994年第1期、86–91頁）、郁之「毛沢東与胡適」（欧陽哲生選編『解析胡適』社会科学文献出版社、2000年、329–343頁）、沈衛威『大河之旁必有大城——現代思潮与人物』秀威資訊科技股份有限公司』2011年、1–28頁、などを参照した。また、直接の交流が見られた青年時期の両者の関係に関する著述は特に多いが、とりわけ詳細な説明がなされている業績として、李鋭『毛沢東——崢嶸歳月（1893–1923）』（北京聯合出版公司、2013年、266–274頁）、金民卿『青年毛沢東的思想転変之路——毛沢東是怎様成為馬克思主義者的？』（社会科学文献出版社、2014年、191–204頁）が挙げられる。なお、日本語では青年時期の思想的交流にやはり焦点を当てた次の業績がある。佐藤一樹「胡適と毛沢東——初期思想の史的考察1919～20年」『愛大史学日本史・アジア史・地理学』第11号、2002年3月、27–60頁。

(2) 3人の著者による毛沢東の伝記については、周一平『毛沢東生平研究史』（中共党史出版社、2006年）に詳しい。なお、スノーによる伝記については石川禎浩の、蕭三による伝記については丸田孝志の研究が、それぞれより詳しく考察している。石川禎浩「『中国の赤い星』再読」石川禎浩編『現代中国文化の深層構造』京都大学人文科学研究所、2015年、1–60頁。丸田孝志「毛沢東の物語の成立と展開——日中戦争期から建国初期」『東洋史研究』第77巻第4号、2019年3月、717–752頁。同「毛沢東伝の軌跡——蕭三作の伝記にみる毛沢東のイメージ形成」本論文集所収。

(3) この点については、松井博光とジェローム・チェンによる次の言及が参考になる。「毛沢東という人間の伝記を構成する場合、今日なおE・スノーの記述（『中国の赤い星』）と蕭三の毛沢東伝が根幹になっており、それ以外には資料がとぼしい、ということは、毛沢東伝を志すもの、毛沢東という人間に関心をいだくものにとって、周知のことがらである。この二

つの著作が公刊されてから、すでに久しいが、今日、事情はほとんど変わっていない」（松井博光「訳者あとがき」李鋭（玉川信明･松井博光訳）『毛沢東その青年時代』至誠堂、1966年、348頁）。「しかし中国語では、幾冊かの毛に関するきわめて有益な著作がある。李鋭の『毛沢東同志的初期革命活動』は、明らかにマルクス主義的観点から書かれてはいるが、それにもかかわらず、それまで公開されていなかった資料のいくつかを含み、よく考証のゆきとどいた書物である。この本はこの問題を研究するには、欠かすことのできない著作であって、英訳されるべきである。蕭三の『毛沢東同志的青少年時代』は、学校友達と親しい友人による毛についての話である。これは蕭瑜の『毛沢東と私は乞食だった』よりもずっと良い」（ジェローム・チェン（徳田教之訳）『毛沢東　毛と中国革命』筑摩書房、1971年、18頁。Jerome Chen, *Mao and the Chinese Revolution*, Oxford University Press, 1965, p. 14.）。

(4) エドガー・スノー（松岡洋子訳）『増補決定版　中国の赤い星』筑摩書房、1975年、101頁。なお、この二箇所の日本語版の訳述は、英語原著（Edgar P. Snow, *Red Star over China*, Victor Gollancz, 1937; Random House, 1938; revised in 1938）の記述を正確に反映したものである。

(5) 同、105頁。なお、この二箇所の中国語版（愛特伽・斯諾（王厂青ほか訳）『西行漫記』復社、1938年）の訳述は、英語原著の記述を正確に反映したものである。

(6) 蕭三『毛沢東同志的青少年時代』新華書店、1949年、102–103頁。

(7) ちなみに、蕭三「毛沢東」『不可征服的中国』（ロシア語版）（ソ連国立軍事出版社、1940年（中国語訳は『党的文献』1991年第3期、29–34頁、第4期、81–84頁、に掲載））、蕭三「毛沢東同志的少年時代」（『解放日報』1941年12月14日）、蕭三「毛沢東同志的初期革命活動――「偉大的50年」的一章（初稿）」（『解放日報』1944年7月1、2日）、蕭三「毛沢東同志伝略」『北方文化』（第2巻第3期、1946年7月、8–11頁）といった蕭三の手になる先行するこれらの著述には、胡適に関する記載は見られない。これらはいずれも比較的短い文章であり、そのなかで胡適について叙述する必要は特になかったということなのであろう。

(8) 李鋭はこの間、図書館などでの調査や毛沢東の親戚や友人へのインタビューを通じて若き日の毛沢東に関する史料収集に努めた。そしてその成果を『毛主席旧作輯録』としてまとめ50部を印刷したが、「有害無益」との批判を受け50部すべてを提出させられた。しかし、若く血気盛んであった李鋭はかえって発憤し、この研究の成果を『毛沢東同志的初期革命活動』にまとめ上げ公表したとのことである。李鋭「中共創始人訪談録序」同『李鋭期頤集』天地図書有限公司、2016年、82–83頁。なお、李鋭を批判したのは胡喬木であったとのことである。李鋭「黎澍十年祭」黎澍紀念文集編輯組編『黎澍十年祭』中国社会科学出版社、1998年、27頁。

(9) 李鋭『毛沢東同志的初期革命活動』中国青年出版社、1957年、1頁。「毛沢東同志的初期革命活動」は、『中国青年』掲載版よりも詳細なものが『党史資料』1953年第1期（1953年6月1日）、第2期（7月1日）にも掲載されているが、胡適に関する言及はやはり見られない。この点および上掲の李鋭「黎澍十年祭」の存在については、石川禎浩先生の教示を受けた。

(10) 李鋭『毛沢東同志的初期革命活動』27–28頁。

(11) 同、99頁。

(12) ただし、李鋭は「介紹新出版物」が胡適による執筆だとのちには指摘している。李鋭『毛沢東――崢嶸歳月（1893–1923）』270頁。しかし、なぜ『毛沢東同志的初期革命活動』において、上述のような歪曲に等しい説明を行ったのかについての説明はない。

(13)『独立評論』は1932年に創刊、1936年末に一度停刊し、1937年4月に再開するも7月に終わりを迎えている。

(14)「致蔡元培」1936年9月22日。『毛沢東書信選集』人民出版社、1983年、66–69頁。

(15) 胡縄「胡適論――対於胡適的思想方法及其実際応用之一考察」『新学識』第1巻第4期、1937年3月20日、178頁。胡縄は翌年、中国共産党に入党している。

(16)「美帝走狗胡適団緊眼睛吹牛、乞求美国主子救命」『人民日報』1949年4月28日。胡適を戦犯と記す記事も見られるが(「還須准備長期而堅決的闘争、為“五四”三十周年紀念作」『人民日報』1949年5月4日)、実際に戦犯に指定されたかどうかは定かではない。

(17) 胡適思想批判運動についての研究は複数発表されているが、本稿では特に次の研究を参照した。謝泳「胡適思想批判与『胡適思想批判参考資料』」『開放時代』2006年第6期、44–54頁。尤小立「書写与塑造:1949年後「五四」政治話語及政治形像在大陸的確立:以「胡適思想批判」運動為中心的討論」『国立政治大学歴史学報』第42期、2014年11月、187–260頁。

(18) この点については、次の研究を参照。丸山昇「「紅楼夢」研究批判――学問と思想」同『文化大革命に到る道――思想政策と知識人群像』岩波書店、2001年。

(19)「関於『紅楼夢』研究問題的信」1954年10月16日。中共中央文献室編『建国以来毛沢東文稿』第4巻、中央文献出版社、1990年、574頁。

(20) 鍾洛「応該重視対『紅楼夢』研究中的錯誤観点批判」『人民日報』1954年10月23日。

(21) すでに述べたように、若き毛沢東と胡適との関係についての著述は少なくない。特に詳細であるのは、佐藤一樹「胡適と毛沢東」、李鋭『毛沢東――崢嶸歳月(1893–1923)』、金民卿『青年毛沢東的思想転変之路』であり、合わせて参照されたい。

(22)『新民学会会務報告』第1号、1920年冬。張允侯ほか編『五四時期社団』(一)生活・読書・新知三聯書店1979年、577頁。

(23)「毛沢東が来訪し、湖南のことを議論した」とこの日の胡適の日記に記載がある。季羨林主編『胡適全集』第29巻、安徽教育出版社、2003年、55頁。

(24)「致胡適信」1920年7月9日。中共中央文献研究室・中共湖南省委『毛沢東早期文稿』編輯組編『毛沢東早期文稿　1912・6–1920・11』湖南出版社、1990年、49頁。

(25) こうした署名がなされたのは、毛沢東が北京大学で開講されていた胡適の講義を傍聴、その内容に非常に敬服し、直接会って教えを請いたいと希望していたためである。胡適はこの手紙をそのほかの書信とともに上海に設けられていた合衆図書館に保管していたが、日本統治下で失われてしまい非常に残念がっていたという。以上の証言は、黎澍と李鋭が1987年に銭鍾書を訪ねた際、銭から伝え聞いたものである。李鋭「黎澍十年祭」38頁。なお、シュラムと李鋭は、胡適の講義の際、毛沢東が質問をしたが、毛沢東が正規の学生ではないと知った胡適は返答を拒絶したとの話をそれぞれ伝えている。この出来事について、シュラムは毛沢東が大学という高い身分意識を帯びた社会に完全には受け容れられなかったことを示すとし、李鋭は毛沢東に生涯忘れがたい恥辱を与えたと説明している。Stuart Schram, *Mao Tse-tung*, London: Penguin Books, 1966, p. 48. 李鋭「「近看」毛沢東」同『李鋭期頤集』54頁。いずれも興味深い指摘だが、両者ともに根拠となるべき史料を明示しておらず、胡適が実際に拒絶したのかどうか判然としない。たとえ胡適が拒絶したのだとしても、本稿で述べるように若き毛沢東は胡適の考えを真摯に参照しており、大きな打撃を受けていなかったのだろう。

(26) 黎邵西は、黎錦熙として普通知られる。湖南省立第一師範学校教員であり、毛沢東も教

えを受けた一人である。

(27) 毛沢東「致周世釗信」1920年3月14日。中共中央文献研究室・中共湖南省委『毛沢東早期文稿』編輯組編『毛沢東早期文稿　1912・6–1920・11』474頁。

(28) 適〔胡適〕「介紹新出版物」『毎週評論』第36号、1919年8月24日。

(29) 毛沢東「民衆之大連合」『湘江評論』第2、3、4号、1919年7月21、28、8月4日。

(30) 適〔胡適〕「介紹新出版物」『毎週評論』第36号、1919年8月24日。ただし、毛沢東の名前には言及していない。

(31) 講演記録は、陳独秀が立ち上げ胡適も運営に参与していた『毎週評論』に掲載された。杜威（涵廬〔高一涵〕記）「美国之民治的発展」『毎週評論』第26号、1919年6月15日。

(32) 竹内実「評論「初期における毛沢東」」同編訳『毛沢東初期詞文集――中国はどこへ行くのか』岩波書店、2000年、251頁。

(33) 沢東「健学会之成立及進行」『湘江評論』臨時増刊第1号、1919年7月21日。中共中央文献研究室・中共湖南省委『毛沢東早期文稿』編輯組編『毛沢東早期文稿――1912・6–1920・11』369頁。後述する問題研究会の研究項目の一つにも、デューイの教育学説を挙げ、また「湘譚教育促進会宣言」においても「大いに研究の価値がある」と言及している。「湘譚教育促進会宣言」『大公報』1920年8月3日、4日。同書、495–496頁。なお、「美国之民治的発展」は『杜威五大講演』『現代教育的趨勢』といったデューイのほかの著作とともに、毛沢東らが設立した文化書社の取り扱い書籍に含まれている。「文化書社通告好学諸君」『湖南通俗報』1920年11月10日。同書、541–542頁。

(34) 胡適とデューイの関係については、次の研究を参照。章清「胡適とデューイ――その師弟関係から見える中国近代思想の一齣」趙景達ほか編『講座　東アジアの知識人　第3巻「社会」の発見と変容――韓国併合～満洲事変』有志舎、2013年、332–344頁。

(35)「実験主義」と題する講演は、教育部（1919年3月初旬）と江蘇省教育会（1919年5月2日）で行われている。前者については、その講演に参加した王光祈が3月16日の時点で「日曜日」に開かれたと述べており、おそらく3月9日に開催されたのではないかと思われる。若愚「兄現」『毎週評論』第13号、1919年3月16日。毛沢東は3月12日に帰郷のため北京を離れているが、この講演を聞いていた可能性もあるだろう。なお、前者の講演は胡適「実験主義」『新青年』（第6巻第4期、1919年4月15日。ただし、これは完全なものではなく、胡適『実験主義』学術講演会、1919年が別に刊行されている）、後者の講演は潘公展筆述「実験主義――記胡適之先生在江蘇省教育会演説辞」『新教育』（第1巻第3期、1919年5月）として文字化された。題名は同一だが、内容は異なる。

(36) いずれも、『新教育』（第1巻第3期、1919年5月）に掲載された。『新教育』第1巻第3期は「杜威号」とされ、胡適の文章のほかにもデューイの写真も含めデューイ関連の文章が複数掲載されている。『新教育』の中心は北京大学教授蔣夢麟であり、コロンビア大学でデューイの教えを受けた蔣は、胡適とともにデューイの招聘・紹介に尽力した。

(37) 元青『杜威与中国』（人民出版社、2001年、140–142頁）は、後述する問題研究会も含め、毛沢東は胡適を通じデューイの強い影響を受けていたと指摘している。なお、胡適思想批判運動においては、デューイの学説も猛烈な批判を浴びたが、毛沢東がデューイに強い関心を抱いていたという事実は俎上に載せられていない。

(38)「問題研究会章程」『北京大学日刊』1919年10月23日。

(39) 章程は全12条からなるが、多くの条がさらに細かい項目に分かれており、完成までに一

定の準備期間が必要だったことだろう。したがって、四篇すべてを事前に読んでいたとは考えにくい。李鋭は李大釗「再論問題与主義」についても、すでに見ていたかもしれないし、間に合わずに見ていなかったかもしれないと二つの可能性を指摘している。李鋭「五四運動中的青年毛沢東」『歴史研究』1979年第5期、32頁。

(40) 胡適「多研究些問題、少談些主義」『毎週評論』第31号、1919年7月20日。

(41) 李大釗「再論問題与主義」『毎週評論』第35号、1919年8月17日。ただし、問題と主義をめぐり胡適と李大釗の対立面ばかりを強調する見解は、1919年当時の実情とは適合しないことが指摘されている。胡適による主義への批判は、安福系の王揖唐が社会主義について語ったことに向けられたという意味合いが強かったからである。この点の詳細は、次の研究を参照。羅志田「対“問題与主義”之争的再認識」同『激変時代的政治与文化――従新文化運動到北伐』北京大学出版社、2006年。

(42) 中共中央文献研究室・中共湖南省委『毛沢東早期文稿』編輯組編『毛沢東早期文稿――1912・6–1920・11』402頁。

(43)「多研究些問題、少談些主義」に先行する次の文において、そうした見解は披露されている。適〔胡適〕「歓迎我們的兄弟――『星期評論』」『毎週評論』第28号、1919年6月29日。この一文で、胡適は「研究」の結果に基づき議論することを求めている。「研究」とは、「学問上の研究と実地的考察」を指し、あらゆる「学理」と“Isms〔主義〕”はこの種の考察のための「工具」に過ぎないとしている。毛沢東の主張と完全に一致するわけではないものの、言葉遣いも含めて胡適の主張が毛沢東に影響を与えたことは明らかである。

(44) 李鋭『毛沢東同志的初期革命活動』108頁。胡適思想批判運動においても、毛沢東が参照したであろう「多研究些問題、少談些主義」は「悪名際立つ」とされるなど、辛辣な評価を受けていた。汪子嵩・王慶淑・張恩慈・陶陽・甘霖「批判胡適的反動政治思想」『胡適思想批判』第1輯、生活・読書・新知三聯書店、1955年、21頁。

(45) 和生〔蔡和森〕「批評“好政府”主義及其主張者」『先駆』第9期、1922年6月20日、3頁。

(46) 陳独秀「対於現在中国政治問題的我見」『東方雑誌』第19巻第15号、1922年8月10日、133頁。

(47) 独秀「寸鉄――思想革命上的連合戦線」『前鋒』第1期、1923年7月1日。鄧中夏も同様の認識を示している。中夏「思想界的連合戦線問題」『中国青年』第15期、1924年1月26日。

(48) この点に関しては、次の研究が詳細に論じている。羅志田「“五四”到北伐期間胡適与中共的関係」同『激変時代的文化与政治――従新文化運動到北伐』北京大学出版社、2006年。

(49) 毛沢東「致周世釗信」1920年3月14日。中共中央文献研究室・中共湖南省委『毛沢東早期文稿』編輯組編『毛沢東早期文稿――1912・6–1920・11』475頁。

(50) 季羨林「為胡適説幾句話」『群言』1988年第3期、14–15頁。

(51)「在中央会議上的談話――陳毅同志伝達」(1947年12月)。鋼二司武漢総部ほか編印『毛沢東思想万歳』(1943. 7–1949. 9)、1967〔8〕年、104頁。『毛沢東思想万歳』のこの版本の特徴については、次に詳しい。陳標「『毛沢東思想万歳』重要版本評介(七)」『湖南科技大学学報』(社会科学版)第15巻第2期、2012年3月、28–34頁。

(52)「丟掉幻想、準備闘争」『人民日報』1949年8月15日。この文章は、『毛沢東選集』第4巻にも収録されている。毛沢東文献資料研究会編・竹内実監修『毛沢東集』(第2版)第10巻、蒼蒼社、1983年、319頁。

(53)「別了、司徒雷登」『人民日報』1949年8月19日。「四評白皮書」『人民日報』1949年8月

29日。「五評白皮書」『人民日報』1949年8月31日。「六評白皮書」『人民日報』1949年9月17日。これらの文章も、『毛沢東選集』第4巻にも収録されている。ただし、「別了、司徒雷登」を除いて、選集収録時に表題の変更がなされている。

(54) 唐弢「春天的懐念——為人民政協四十年徴文作」『唐弢文集』第4巻、社会科学文献出版社、1995年、590頁。唐弢によると、毛沢東は胡適について「この人物も本当に頑固である。私たちは人づてに彼に手紙を送り、彼が戻ってくるよう勧めたのだが、彼は一体何に未練を抱いているのかわからない」とも述べており、胡適に利用価値を認めていた様子が見て取れる。唐弢は魯迅研究など文学研究の分野で知られる人物である。

(55) 上述したように、1920年1月15日の日記に簡単な記載が見られる程度である。

(56) 胡頌平編『胡適先生年譜長編初稿』第5冊、聯経出版事業公司、1984年、1894–1895頁。

(57) 同上。これは、司徒雷登〔John Stuart〕(李宣培・潘煥昆訳)『旅華五十年記』(大華晩報社、1954年)への序文に見える一節である。原著にも "my former student Mao Tse-tung" との記載がある。Hu Shih, "Introduction", in John Leighton Stuart, *Fifty Years in China: The Memoirs of John Leighton Stuart*, New York: Random House, 1954. 周質平編『胡適英文文存』第3冊、遠流出版公司、1995年、1446頁。

(58)『大公報』には1945年9月2日に掲載された。沈衛威『大河之旁必有大城』9頁。また、複数の新聞に掲載されたことについては、胡頌平編『胡適先生年譜長編初稿』第5冊、1895頁。

(59) 胡適「1951年5月17日日記」。季羨林主編『胡適全集』第34巻、116頁。

(60) Hu Shih, "My Former Student, Mao Tse-tung", *The Freeman*, 1951, Jul. 2. 周質平編『胡適英文文存』第3冊、1307–1312頁。なお周質平「胡適的反共産思想」(同『光焔不息——胡適思想与現代中国』九州出版社、2012年)は、胡適の反共の概要を理解する上で有用だが、"My Former Student, Mao Tse-tung" については、特に検討を加えていない。

(61) 毛沢東とのやりとりは、次の部分に記載されている。Robert Payne, *Mao Tse-Tung: Ruler of Red China*, New York: Henry Schuman, 1950, pp. 208–221.

(62) 管見の限り、欧陽哲生『探尋胡適的精神世界』(秀威資訊科技股份有限公司、2011年、203頁)が、胡適が厳しい内容の書評を執筆した、とごく簡単に言及するのみである。

(63) *The Freeman* については、次の研究を参照。Charles H. Hamilton, "Freeman, 1950–", Ronald Lora and William Longton Henry, (eds.), *The Conservative Press in Twentieth-Century America*, Westport, Connecticut: Greenwood Publishing Group, 1999, pp. 321–330.

(64)『胡適全集』(安徽教育出版社)は、こうした配慮からほかにも複数の文章を収録していない。この点については、次を参照。周質平「胡適光焔不息」潘光哲主編『胡適与現代中国的理想追尋——紀念胡適先生120歳誕辰国際学術討論会論文集』秀威資訊科技股份有限公司、2013年、267–268頁。『胡適全集』(安徽教育出版社)の抱える如上の問題は、2018年より刊行中の潘光哲主編『胡適全集』(中央研究院近代史研究所)が十分に意識するところであり、その刊行完結が待たれる。

(65)「毛沢東同志的初期革命活動」について、胡適はそれが1945年に発表されたものであること、1920年から23年までの毛沢東の活動を叙述したものだと指摘している。この指摘から、これは蕭三「毛沢東同志的初期革命活動——「偉大的50年」的一章(初稿)」(『解放日報』1944年7月1、2日)と同一内容の文章であると考えられる。胡適の指摘によると、「毛沢東同志的初期革命活動」は多くの非公式版が流通したとのことであり、『解放日報』版に基づくいずれかの版を胡適は利用したのだろう。

(66) ただし、『西行漫記』の修正も十分ではない。『西行漫記』は、党中央委員会に陳独秀、張国燾、楊民哉（訳音）、譚平山、陳公博、劉燕青（訳音）、殷秀松、施存統、沈玄廬、李漢俊、李達、李森（訳音）らがいたと指摘するが、楊民哉は楊明齋、劉燕青は劉仁静、殷秀松は兪秀松、李森は李啓漢（李森）であろう。愛特伽・斯諾（王厂青ほか訳）『西行漫記』復社、1938年、185頁。なお、結党当時の中央委員は陳独秀、張国燾、李達であり、*Red Star over China*、『西行漫記』、そしてそれを受けた胡適の記述は、誤解を生じさせるものである。『西行漫記』と英語原著との関係については、石川禎浩「『中国の赤い星』再読」（14–16頁）に詳しい。

(67) Hu Shih, "My Former Student, Mao Tse-tung". 周質平編『胡適英文文存』第3冊、1309頁。

(68) 同上。

(69) 同、1311頁。これは胡適による評価に限った指摘ではなく、日本語版の訳者もペインの著作には「政治的、経済的理論的な方面の叙述には随分間違っていると思われる箇所」があると認めている。ただし、「毛沢東の精神や性格の分析に関しては、非常なひらめきを示しており、新たに学ばされるところが多い」とも述べている。ロバート・ペイン（田辺和一訳）『毛沢東』東和社、1953年、284頁。

(70) Hu Shih, "My Former Student, Mao Tse-tung". 周質平編『胡適英文文存』第3冊、1311頁。

(71) 胡頌平編『胡適之先生晩年談話録』中国友誼出版公司、1993年、260頁。

(72) 陳垣「給胡適之一封公開信」『人民日報』1949年5月11日。胡適は当初、香港発行の共産党系英文雑誌 *Far Eastern Bulletin*（Vol. 2, No. 22, June. 4, 1949）に掲載された英文訳により陳垣の書簡の内容を確認し、その後『華僑日報』（1949年6月15日）掲載の中文版を読んでいる。胡適「1949年6月19日日記」「1949年6月21日日記」。季羨林主編『胡適全集』第33巻、749、750頁。陳垣の書簡および後述する胡思杜の声明とそれらに対する胡適の反応については、潘光哲「胡適対「知識分子思想改造」的回応（1949–1952）」（同主編『胡適与現代中国的理想追尋』）が詳細な考察を行っており、多くを教えられた。

(73) 『華僑日報』掲載の中文版が確認できないため、本稿では陳垣「給胡適之一封公開信」（『人民日報』1949年5月11日）、および胡適「共産党統治下没有自由——跋所謂陳垣「給胡適之一封公開信」」（『自由中国』第2巻第3期、1950年2月1日）に紹介されている陳垣書簡の内容に基づいて検討を行う。

(74) 胡適は、「介紹幾部新出的史学書」（『現代評論』第4巻第91期、1926年9月4日）において陳垣の『二十史朔閏表』を好意的に取り上げるなど、陳垣の学術研究の成果に注意を払っていた。「給胡適之一封公開信」が公表される直前の1948年12月にも、陳垣に学術面での教えを請う書簡を送付しているが、これについては返事を得ることができなかったとしている。胡頌平編『胡適之先生年譜長編初稿』第6冊、2062–2063頁。胡適と陳垣の学術をめぐる交流については、次の研究を参照。逯燿東「把胡適当成個箭垛」同『胡適与当代史学家』東大図書公司、1998年、96–99頁。

(75) 以下、胡適による陳垣への批判は、胡適「共産党統治下決没有自由——跋所謂陳垣「給胡適之一封公開信」」（『自由中国』第2巻第3期、1950年2月1日）に基づく。

(76) ただし、逯燿東は陳垣が当時白話文で文章を執筆しており、また熱心に学習に努めていたことから、この書簡は陳垣自身の手になるものだろうとしている。逯燿東「把胡適当成個箭垛」100–101頁。この点については、潘光哲「胡適対「知識分子思想改造」的回応（1949–1952）」（246頁）にも、関連研究の紹介がある。

(77)「胡適思想在大陸」『徴信新聞』1951年2月26日。胡頌平編『胡適之先生年譜長編初稿』第6冊、2189頁。
(78) 胡適はこの時期、『大公報』(香港) などに掲載された自身に対する批判記事の切り抜きを、日記にしばしば添付している。季羨林主編『胡適全集』(第34巻、146–148頁) などを参照。
(79) 胡頌平編『胡適之先生年譜長編初稿』第6冊、2188頁。
(80) 陳垣「給胡適之一封公開信」『人民日報』1949年5月11日。
(81) 胡思杜「対我父親——胡適的批判」『大公報』(香港) 1950年9月22日。
(82) 同上。
(83)『中央日報』1950年9月29日。この時点では、傅斯年は「対我父親」を確認しておらず、『香港時報』やロイター通信などが伝える胡思杜の胡適批判に基づき、反論を執筆していた。10月初めに「対我父親」を読んだ傅斯年は、「私が先に述べたことが確かにその通りであったと、さらに信じるにいたった」との述懐を、『中央日報』(1950年10月5日) で公にしている。胡頌平編『胡適之先生年譜長編初稿』第6冊、2150–2152頁。
(84) "Chinese Ex-Envoy Denounced by Son", *The New York Times*, Sep. 23, 1950.
(85) 季羨林主編『胡適全集』第34巻、49–57、59頁。胡適が切り抜き添付したのは、"Chinese Ex-Envoy Denounced by Son" の一節 "Father not Disturbed" とその続報である "The Case of Dr. Hu Shih", *The New York Times*, Sep. 24, 1950である。"The Case of Dr. Hu Shih" については、"there was no "freedom of silence"" など複数の箇所に下線を附している。「沈黙の自由がない」との胡適の評価はアメリカの読者に強い印象を与えたようで、*Time* にも記者の文章と胡適の応答から構成される "Danger Zones: No Freedom of Silence" と題する評論が掲載されている (Vol. 56, No. 14, Oct. 2, 1950)。胡適はこの評論も日記に添付している。胡適「1950年10月4日日記」。季羨林主編『胡適全集』第34巻、66–70頁。なお、1950年10月7日の日記には、胡思杜より9月11日の日付で胡適に送付された書信も収められている。書信の内容は、胡思杜自身の近況を知らせ胡適を気遣うもので、特に不自然な点はない。この書信の発出からまもなく「対我父親」が公表されたことに、胡思杜が強い圧力を受けていると胡適は憂慮していたのではないだろうか。季羨林主編『胡適全集』第34巻、70–71頁。
(86) 沈虎鄒・呉名・岳南「胡適之子胡思杜——拼不上的人生碎片」『人民文滴』2012年第6月号、48–49頁。
(87) 胡頌平編『胡適之先生年譜長編初稿』第7冊、2680、2688頁。
(88) 同、2690頁。
(89) 唐徳剛『胡適雑憶』華文出版社、1990年、156頁。
(90) この文章を執筆する直接のきっかけは、1955年春に『自由中国』より依頼を受けたことによる。胡適「四十年来中国文芸復興運動留下的抗暴消毒力量——中国共産党清算胡適思想的歴史意義」潘光哲主編『胡適全集　胡適時論集』7、中央研究院近代史研究所、2018年、343頁。したがって、『自由中国』に掲載することが予定されていたのであろう。
(91) 王洪鈞「我要継続向前——胡適先生決心再継続奮闘十年」『中央日報』1956年10月12日。詳細は次の研究を参照。席云舒「胡適「中国的文芸復興」論著考」(下篇)『社会科学論壇』2015年第9期、198頁。
(92) 胡適「四十年来中国文芸復興運動留下的抗暴消毒力量」344頁。
(93) 同上。

(94) 毛沢東「新民主主義論」毛沢東文献資料研究会編・竹内実監修『毛沢東集』(第2版) 第7巻、蒼蒼社、1983年、188頁。

(95) 胡適と毛沢東による五四運動評価の齟齬については、次の研究も参照。Elisabeth Forster, *1919 – The Year That Changed China*: *A New History of the New Culture Movement*, Berlin: De Gruyter Oldenbourg, 2018, pp. 156–194.

(96) 以下の引用は、次の文献に基づく。「在頤年堂的談話」1957年2月16日。鋼二司武漢総部ほか編印『毛沢東思想万歳』(1949. 10–1957. 12) 1967〔8〕年、144頁。

(97) 中共中央文献研究室編『毛沢東伝』第3冊 (中央文献出版社、2010年、298–299頁) も、同日付になされた毛沢東の「我々が胡適批判を開始した時期、〔その批判は〕よいものだったのだが、しかしあとになって少々偏りが生じ、胡適のすべてを消し去ってしまった。以降は一、二篇の文章を書いて、いくらか修正をしなければならない」との談話を紹介している。